

国際舞台に生氣ある人間模様

関西の国立大を出て、将来の安寧な暮らしを夢見、公務員がよからうと国の情報機関、公安調査庁に入ったマンガオタクの梶壮太。研修を終え配属された神戸事務所には上司の柏倉だった。彼は根室事務所で魚の仲買人を装いながら、対ソ諜報活動を行ってきた筋金入りのインテリジエンス・オフィサーである。

この柏倉の経験豊富で人間味もある指導を受けながら、港街神戸という国際性ある特殊な土地柄にも慣れ親しみ、プロの諜報マンへと育っていく梶壮太が主人公。

この舞台で、壮太が会ったのはウクライナの造船技



「鳴かすのカッコウ」

手嶋龍一著



師あがりの大型中古船ブローカーとは表向き、日本の企業に入り、実は中国のインテリジエンスであるコヴァアルチュック。香港チャイニーズで、これも中国、朝鮮のスパイかと思われていたが、実はアメリカの諜報員であると知る女性アグネス。

そして壮太の祖母が営む山陰は松江の古美術店に、突然現れる日本の古典と美術に造詣深い、イギリスの諜者ブラッドレー。こうした人物の動静を後背とし、作者手嶋龍一氏「写真」は生々しい国際情勢を手練のさばぎで描写する。

手嶋氏は元NHKワシン

トン支局長などの実績のもと外交ジャーナリストの盛名をもつが、表千家の茶道を嗜むというわが国伝統文化についても、並々ならぬ素養をもつ。併せ付記すると、氏はインテリジエンス小説、ノンフィクション作家として知られ、11年ぶりの刊行が本作となる。

梶壮太は、柏倉の意をくみ、公安職員の身分のまま、松江で古美術商におさまる。神戸で優秀な同僚であったミスロレンスこと西海帆稀への壮太の想いが、さわやかな余韻を残す。

只今の国際情勢を織り上げた布舞台上、生氣ある人間模様を描き上げたテキスタイルをほつふつとさせるインテリジエンス作品である。(遠藤仁誉、米子市)

(小学館・1870円)